

半原宮大工「矢内家」とは

矢内家と半原宮大工

愛甲郡半原村は、農業、養蚕に重きをおく村ですが、農閑期には大工・木挽・桶屋・屋根屋などを兼ねる者も多く、享保 13（1728）年には、300 軒ほどの村中に「大工四人御座候事」との記録があります。

その後、江戸時代中期の享和年代（1800）頃から、急激に発展したのがこの展示会の主役である「半原宮大工矢内匠家」です。匠家としての祖 12 代安則は、江戸本所立川通りにあった立川流初代幕府御用大工・立川小兵衛富房から工匠技術（鎌倉曲尺工法）を伝授されたと伝えられています。

若くして小田原大久保家のお抱え大工となった安則は、後に江戸城本丸作事方となり、一代限りの匠姓「柏木」を許されています。半原宮大工は、安則を源流の基盤としつつ様々な寺社造営の建立を継承しました。「番匠往来」や絵図面などの遺された建築関係資料がその伝統を伝えますが、残念ながら 16 代矢内稻尾高秀をもってその系統は途絶えます。

半原宮大工「矢内家」とは

矢内家の系譜

矢内家の前姓は柳川といい、匠家は12代安則から始まります。安則は小田原大久保家のお抱え大工となり、江戸城作事方に登用されました。匠姓「柏木」を一代限り許され、以後孫の高光まで名乗りました。

14代高光26歳の時、作事方を申し付けられ、名字帯刀とともに匠姓「矢内」を許されています。その後、16代高秀まで矢内を名乗ります。

12代柳川右兵衛藤原
安則（後柏木）
1759-1834

13代柏木徳太郎
（前柳川）
1788-1871

14代高秀

半原宮大工「矢内家」とは

宮大工、大棟梁とは

宮大工とは、社寺建築を手がける大工職ですが、その棟梁は「五意」に長けていなければならないとされています。五意とは「地割・算合・絵用・作事・彫物」のことを指します。現在では「設計（絵用）・積算・施工・装飾」であり、それらすべてに精通したものが「大棟梁」とよばれます。

江戸時代末期以降、神社仏閣普請の「堂営大工」である宮大工から、「数奇屋大工」（数奇屋、茶室普請）、「機械大工」（水車など木製工商機械）などが分散分業していきました。彫刻大工（彫物師）にも、大棟梁の門下職人と普請場所を渡り歩く旅職人がいました。

安則が師事した立川小兵衛富房の書献は、「匠家を識り、兄弟子の雛形を解き、日夜を勤め、軒、？木の雛形の技術は算出でなく曲尺に直し、絵様集に綴り、門弟の稽古の便とし、書献で広め同志と自分を励み、誤まりなく正しさを増せ」と説きます。安則はこれを

一門、近郷大工仲間の統一規範としました。

半原宮大工「矢内家」とは

矢内家の彫刻、絵画

大工の棟梁が長けていなければならないとされた「五意」。それは「地割・算合・絵用・作事・彫物」のことですが、ここには絵用、彫物が入っています。矢内匠家の棟梁たちは、建物の絵図面を描くだけでなく、優れた彫刻、絵画も遺しています。

矢内右兵衛高光が描いた江戸時代末期の「職人尽し」からは、生きいきと仕事をする作事場の職人だけでなく、神棚の様子なども伺われます。また、半原の大工職をはじめ各種職人による講中である細野太子講の掛軸「聖徳太子（16歳孝養像）」も高光が描いています。太子は神社仏閣建設の祖、万能具現者（曲尺の規矩術等）として職人の守護神として信仰されています。

地域の稻荷講の「金色姫養蚕掛軸」なども高光が筆をとったものです。

彫刻としては、恵比寿・大黒像、東照大権現、神武天皇などを見ることができます。

半原宮大工「矢内家」とは

大工仲間掟書と矢内家

安永5年(1776)の「大工仲間組合掟書帳」には半原だけでなく荻野、飯山を含む42ヶ村、98人、親方係りの弟子7人の連名書が綴られ、次の掟が定められています。

- 一 親方無之者 細工職分と致を可相改事
- 一 寄弟子一切無用ニ可致事
- 一 年季弟子掛り之内無理障有候者ハ其後職分相留メ可申事
- 一 連中有之村方ニ而細工請負候節ハ其後ノ人江相届ケ速ニ商売仕事
- 一 掟道相背キ候ハ過料ヲ取仲間会合之雑用可致事
- 一 入作料ハ金壹人 朱八日定メ
- 一 請取組工八百工ニ付金三両弍朱ニ扶持米一石之通り
- 一 仲間会合之節不参之者も会日掛り雑用等行事江無遅滞可相届事

大工仲間は「寺院建築の祖」という伝承により神格された聖徳太子を守護神として信奉し、太子講を組織して祀っていました。

半原宮大工「矢内家」とは

矢内家と江戸城普請

江戸城普請は明治になるまで継続され、最盛期の弘化元年(1844)には職方数 21,302 もの人が携わっていました。天保 15 年(1844)に作事方御用役所から「御本丸御作事方下 柏木右兵衛 清水大和 右兩人村へ職人催促二罷り越シ候」との達状が出ていますが、矢内、柏木家匠は「柏木」姓を許された寛政末年頃から、江戸城普請に関与していました。

嘉永 5 年(1852)、矢内右兵衛の「西丸御普請中 萬諸入用覚之帳」は 8 月 30 日から 10 月 15 日までの複数の職方、金銭の出納が記されています。安政 3 年(1856)、「竹橋御門西大番所外張山縄木戸門共 正寸書」には各作事箇所の詳細な寸法が綴り書きされています。同年には、神田橋御門普請もあり、仕様、地絵図が遺されています。

明治 6 年(1873)、「竹橋御門御陣営築造時計櫓 仕様注文書」は八角方面造、陸軍省の特殊な建物でした。高光は維新後も海軍省、陸軍省で御用方に図書方、作事方を務め、半原大工仲間を送り込んでいました。

半原宮大工「矢内家」とは

矢内の主要普請 大山寺

雨降山大山寺は大山の中腹に位置する真言宗大覚寺派の古刹です。明治の神仏分離後、不動堂は取り払われ阿夫利神社下社となり、現在地に移行されました。明治9年(1876)に大山寺不動尊大堂の建造が起工しました。棟梁は大山宮大工大棟梁手中明王太郎、副棟梁半原宮大工矢内右兵衛らにより、9年の月日を費やし明治17年に落慶しました。

手中明王太郎が建造設計を主導総括し、矢内右兵衛は建造の作事を総括しました。これは矢内家だけでなく柳川、香川、河内、後藤各匠家など一門一族をあげての大仕事でした。

大正4年(1915)に大山寺本堂宮殿(厨子)が落慶しましたが、朱塗り、大型禅宗様式須彌壇の座をもつ本格的なものです。四方丸柱は綾菱地紋彫、頭貫水引虹梁、木鼻は獅子に猊、枅組斗?、禅宗様尾?は猊に龍の透彫。

棟梁は矢内稻雄高秀で、大正3年の建割絵図があります。高光による明治33年のものは宮殿構造着手期の絵図と考えられています。

半原宮大工「矢内家」とは

矢内の主要普請 時計櫓

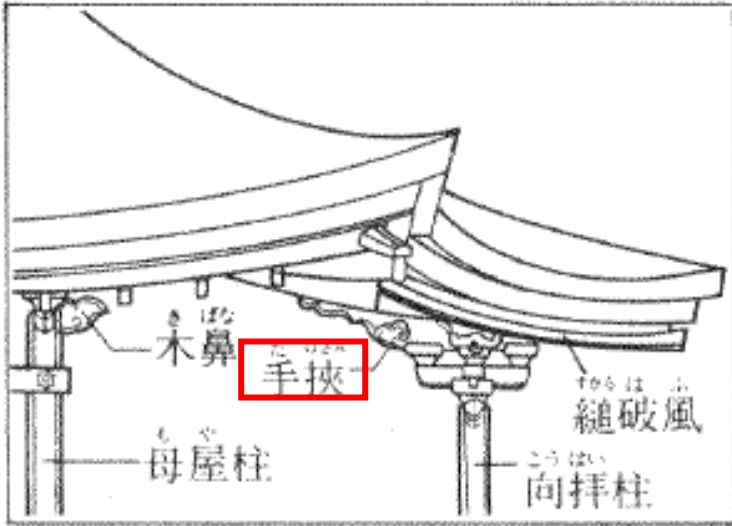
矢内匠家は、寛政末年頃から江戸城普請に関与していましたが、高光は維新後も海軍省、陸軍省で御用方に図書方、作事方を務め、半原大工仲間を送り込んでいました。

明治6年(1873)、「竹橋御門御陣営築造時計櫓 仕様注文書」は八角方面造、陸軍省御陣営の特殊な建物でした。地絵図面の図書方は矢内右兵衛高光、作事方を矢内稻太郎が務めていました。稻太郎は高光の長子で、半原宮大工集団を統一した15代大棟梁でした。

同じ年、「海軍省御用諸方判取修船所 矢内右兵衛」と綴られた覚書は、資材料金、各職方、賃金等が記載され、関連絵図があります。

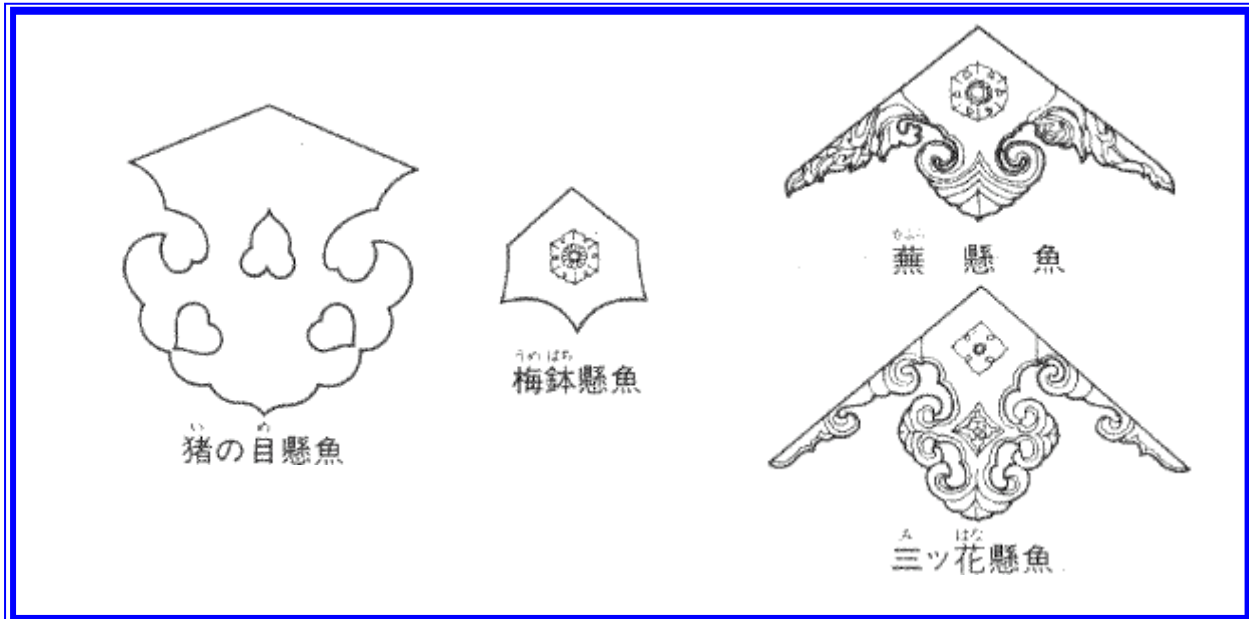
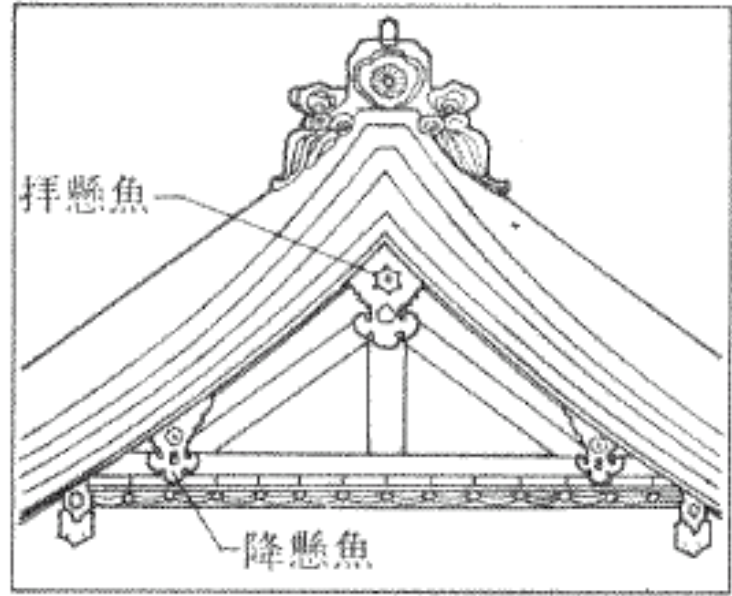
- ① 修船所内ドック場大工木屋百分宿之地絵図(90坪)ポンプ小屋
- ② 修船所内練鉄小屋百分一地絵図(90坪)製罐所、乾行盤機械庫
- ③ 御役所地絵図(四拾分一之割)石川島海軍省之内主船寮 明治7年3月矢内右兵衛
- ④ 玄関昇降口付生徒運動所

⑤ 修練所 13 教室便所付棟



「手挟」
は図の位
置に使わ
れています。

「懸魚」
は図のよう
についてい
ます。種
類も多様。
展示は上
下逆です。



半原宮大工「矢内家」とは

社寺建築の細部

郷土資料館には、厚木市関口の出町成造様から寄贈された「猪の目懸魚」（旧日枝神社）が収蔵されています。もとは、屋根の切妻破風の三角形の頂点のところにしている装飾の彫刻でした。本来の目的は、その部分の補強と棟木の先端を隠す目的で付けられていたのですが、凝った装飾が施されるようになります。「猪の目」とはハート型または瓢箪型の彫刻があるものを指します。

また、「手挟」も頂きましたが、これは向拝柱の上部で斗？にのる？の勾配により生じた三角形の空き間を埋めるために設けられた化粧板のことをいいます。これも鎌倉時代の和様とよばれる建築様式に出現し、桃山時代以降には多彩な装飾彫刻となっていくます。

懸魚、手挟に限らず本展の出品資料は宮大工たちの遺した貴重なものです。その解説にも聞き慣れない建築用語が多々用いられています。用語集を用意しましたので、詳しくお知りになりたい方はご自由におとり下さい。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 妙傳寺

上依知にある梅星山妙傳寺は、開山 日蓮上人、開基 本間重連・直重の日蓮宗の古刹ですが、現在の祖師堂（本堂）は矢内匠家が明治42年(1906)に建立したものです。

本堂要所は丸柱、密教本堂の工法は宗派様式技法の普請でした。

平割絵図面は、向拝軒唐破風に須彌壇仏壇を張り出し、^{きざはし}階に外縁を廻す外陣となっています。建割絵図面では入母屋流造の本堂、向拝軒唐破風に水引虹梁、木鼻は獅子に獏、随所の彫刻、懸魚鳳凰という矢内流儀の工法となっています。

祖師堂は日蓮様式の割間となっていて、境欄間には彫刻が施し尽くされ、正面内陣が仏間須彌壇で、奥に厨子仏壇が配されています。

妙傳寺境内には祖師堂の他にも、二天門、釈迦堂（独尊堂）、鐘楼堂、客殿庫裏、弁

天社などの堂宇があります。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 荻野神社

上荻野にある荻野神社は、創立当時は石神社と称し、天正19年(1591)に徳川家康より「相州国中郡上荻野郷参石事」と御朱印を賜っています。御神体は自然石、上・中・下荻野の総鎮守でした。現在の社殿は貞享4年(1687)に棟梁西谷空兵衛重信らによって建てられたものです。

明治3年(1870)に荻野神社と改称、昭和5年(1930)に屋根替え修理を行っていますが、この修復は矢内匠家によるものでした。

建物正面、側面絵図面と竣工落成写真が矢内匠家に遺されており、この絵図面に基づいて修復されたのが現社殿です。

入母屋千鳥破風流造、向拝入千鳥破風に唐軒破風をつけ、棧は銅葺き、幣殿も同様に銅板葺平屋根にされています。

なお、昭和26年には厚木の宮師河内福賢が神輿を再興しています。箱三尺台輪、外陣は朱掛け、堂は立川流儀の素木造、全てに彫刻が施され、均整のとれた神輿です。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 厚木神社

江戸時代、厚木神社の隣には烏山藩厚木陣屋があり、明治中期になると隣地に厚木銀行が創立しています。明治元年(1868)の神仏分離令に伴って牛頭天王社から郷社厚木神社へと改称されました。

矢内匠家に遺された「拝殿屋根修復絵図面」は年号不詳ですが、明治30年(1897)の大火以前のもので、軒唐破風付造で修復されており、14代矢内右兵衛高光の代、半原宮大工集団の普請と考えられています。

現存する厚木神社社殿は、昭和2年に厚木太子講連中が引受け、棟梁は村治元次郎で作事されました。本殿の設計監督には厚木在住の矢内匠家宮師・河内福賢が携わりました。福賢は昭和八年境内の稻荷社再建の棟梁を務めています。素木造で均整のとれた社殿です。

神輿も福賢の手により新調されたものです。河内宮師の特徴である鳥居の巻昇降龍彫刻が施された装飾優美な関東型神輿です。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 船喜多神社

松枝地区に鎮座する船喜多神社は、江戸時代、牛頭天王、熊野大権現とともに厚木の鎮守社でしたが、明治6年(1873)に3社が合祀され郷社厚木神社が創建されました。

船喜多神社は廃社となりましたが再建が望まれ、同23年に厚木町長が神社復旧願を知事に提出、明治25年(1888)に再建棟梁を矢内但馬藤原高光とし、矢内匠家一門によって建てられたものです。氏子地域は松枝、元町、東町でした。

明治25年の社殿平割絵図面によれば、拝殿間口16尺、奥行10尺に階きざはしは擬宝珠高欄に外縁とした切妻神明造です。拝殿は段差のある渡り、本殿は本格的な神明造で、間口8尺、奥行6尺、基壇亀腹は向拝柱に階は擬宝珠高欄に外縁、正面に唐木戸、堂は胴羽目としています。舟肘木で、彫刻の施されていない社殿でしたが、現在は本殿のみ遺されています。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 長徳寺

岡田に位置する寿永山長徳寺は、開基を建長元年(1249)卒の浄光とする真言寺院でしたが、寛喜元年(1229)に浄土真宗に改宗されました。元禄16年(1703)に火災に遭い、再建は隅木の墨書から正徳元年(1711)とみられ、須彌壇には「棟梁 明王太郎」正徳2年の墨書があります。

本堂向拝は、明治25年(1892)に矢内右兵衛高光が棟梁で増築されたものです。遺された絵図面によれば、向拝建造は基石礎盤に向拝柱は頭貫虹梁に木鼻は二面、枅組三斗に中備は墓股とされ、海老虹梁二重に手挟を付け、瓦屋根となっています。

階 きさはし 三段を付けている絵図面からは、高光の普請が向拝のみであったと考えられ、本堂の屋根上に萱葺きが記してある事からも推察されます。

なお、本堂は昭和の時代になって屋根替えされ、境内の寺院伽藍を整え現在に至っています。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 本照寺

下古沢に位置する常栄山本照寺は、開山開基を身延山久遠寺 11 代日朝上人とし、文明 14 年(1482)に建立されたものです。寺領は慶安 2 年(1649)に徳川幕府より 8 石の朱印を下付されています。

現在みられる総木製造りの冠木門は、再建されたものですが、それ以前のものは矢内右兵衛高光棟梁によるものでした。遺された建割絵図面によれば、明治 32 年(1899)に作られた冠木門は屋根無し・木戸無し、塀重門に類似する冠木門独特の造りでした。

冠木の特徴と建間の技法は微妙ですが矢内流儀雛形の作事です。大門に脇板塀と控板塀の四足門の原型であり、近在での建造は少ないものの古代においては正門です。基本的な正方形内法門は、門以外でも宮師技法の根本的な流儀です。

なお、再建時に解体されたこの門の資材の一部が本堂に使用されています。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 弘徳寺

千頭に位置する親縁山弘徳寺は、本山を京都西本願寺、開山 開基を信楽とし、永仁 2 年(1294)以前に建立されたものです。慶安 2 年(1649)に幕府より 29 石他の朱印を下付されましたが地域では最高額でした。

文政 7 年(1824)に本堂が建造されましたが、柏木匠家に地割絵図面が遺されています。

本堂建築は、間口 7 間奥行 6 間入母屋千鳥破風流造で行われました。向拝正面は階に外縁は擬宝珠高欄を三面とし、正面に棧唐戸に左右は舞良戸とされ他は漆喰です。

内陣は、浄土真宗様式を取入れた間取りで、手前に余間とし、奥左右は客間、内陣正面の仏間は須彌壇厨子とされ、周囲は丸柱、奥左右に仏壇安置攸としてあります。間仕切り箇所には額欄間に透彫り欄間が随所に施されています。

本堂の棟札は不詳ですが、絵図面から半原宮大工柏木右兵衛安則棟梁が携わっていました。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の学校建築 厚木小学校

明治 5 年(1872)に学制が全国に発令され近代的な公教育制度が確立されます。最初は寺院などが校舎にあてられました。以後、各地に建てられる学校の校舎は洋風建築で新しい時代の到来を感じさせました。実はこの新しい建築は西洋風の外観を模して作られたもので、手がけたのは日本の在来工法を伝える大工たちでした。

明治 35 年(1902)の厚木小学校建築は宮大工・矢内家によるものです。出玄関は二間の間、水引虹梁に木鼻は左右像鼻、枅組に中備墓股虹梁、そして唐破風屋根を受けた懸魚を付け、随所に彫刻が施された矢内匠家流儀の作事工法といえます。

7月と記された建割絵図面、そして11月の竣工と短期間の作事を可能にしたのは、半原宮大工だけでなく、厚木など近郷大工職人仲間の存在があります。矢内家は寺社の建造とともに学校建築にも貢献しました。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の学校建築 清水小学校

妻田薬師の西側に位置する清水小学校は、明治3年(1870)創立の静学館を引き継いだものです。同13年に薬師境内に校舎を建造、同25年に清水小学校と改称し、現在にいたっています。

大正4年(1915)、現在地に校舎が建造されますが、その棟梁を務めたのが矢内稻雄高秀でした。遺された建割絵図面によれば、木造平屋建寄棟造に、向玄関入母屋造に付属の別棟のある130坪余の瓦葺の基本的な校舎でした。

向玄関の建造は、基盤に向柱、水引虹梁、木鼻は象鼻、枅組に墓股とされた矢内匠家の玄関流儀です。通常、学校の玄関建造工法はその流儀の雛形から作事されています。

校舎建造後50年余を経た昭和47年に新校舎となりましたが、矢内家による玄関は保存が望まれたため、妻田薬師社務所として移築され、現存しています。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

三田小学校棟札

三田小学校は、昭和 48 年まで八幡神社、睦合公民館のあたりにありました。昭和 10 年(1935)、ここに郷土の偉人・井上篤太郎を施主として新校舎が建設されました。

棟札によれば後藤亀五郎を工事監督者とし、大工棟梁を白井静吾、越智保治、成井保蔵、熊坂為三の 4 人が務めました。裏面には今鉾数次、成井治作外 26 人の大工、永島瀧次郎、永島武雄、野口保太郎外 13 人の鳶職おり、総勢 39 名の職人が記されています。

亀五郎は 14 代矢内高光の次男で、愛川町三増の後藤家に養子入しました。三増菅原神社、津久井諏訪神社などの建造に携わり、彫刻もよくしました。その後高峰小学校の校舎建造の棟梁などを務めました。

明治 43 年(1910)、亀五郎は愛甲郡会議員を務めるなど地域にも貢献、ここにも人望の厚さがあらわれています。宮大工棟梁としての後藤家は、亀五郎一代で継承されることはありませんでした。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の学校建築 実業女学校

厚木市林にあります県立厚木東高校の前身は郡立実業女学校でした。実業女学校は、大正2年(1913)に現在、厚木小学校、郷土資料館が建っているこの地に移転、矢内匠家による校舎が建造されました。建割絵図面などはありませんが、「愛甲郡立実業女学校新築工事 諸職工賃支払控帳」が遺されています。

この帳面によれば、総額174円17銭が費やされたこの工事に従事した職人は、「半原方之部 以下八名、厚木方之部 以下八名、村方之部 以下一名」とあります。棟梁を務めたのは矢内匠家16代稲雄高秀でした。

上棟式の写真を遺したのは厚木で塗装業を営んでいた村岡さんでしたが、先の「諸職工賃支払控帳」他にも木挽き八名、鳶人足、雑人足など大工以外の職人が記されています。厚木近郷の大工職の助勢を受けたこの仕事ですが、玄関、向拝部分に宮大工矢内の流儀が施された校舎でした。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内家と厚木の建築物

明治5年(1872)に国立銀行条例が制定され、その制度下で普通銀行が各地に開店しました。厚木銀行は明治23年(1890)に厚木神社南傍で町の有力者の拠出による株式会社でした。明治31年には第78国立銀行厚木支店が開店しました。

矢内匠家に所蔵されている厚木銀行公社建造建割絵図面には「明治三十一年十一月厚木銀行五十分壺之図」とあり、絵図から二階建切妻蔵造であったことが分かります。間口四間、奥行三間半とした蔵造の防火建築で、防犯にも対応する構造は江戸時代の宿場町に往々として存在する建造でした。

外観は雨戸付が通例で、玄関は棧唐戸に雨戸付です。階下の窓は連子窓付で、廂を付けた階下に二階は先桁に、切妻屋根は瓦としてあります。蔵造は全般に土壁厚く漆喰仕上げ、床は板張りに天井を付けるのが内装全般で、間仕切りをするのが特徴です。

あつぎの建物にみる「矢内」の技と仕事

矢内の社寺建築 厚木踊屋台

明治 37 年(1904)、厚木町元町の踊屋台建造のための設計書が矢内匠家に遺されています。屋台は山車と類似していますが、車輪の有無以外にも異なった点があります。

前部が囃子踊舞台、後部は楽屋である点は山車、屋台とも共通です。山車は、楽屋後部に一本柱建てに鉾（標山飾台）、二層、三層の鉾山車などもあって堂宮屋根造もあります。設計書は、厚木町の武田源七、溝呂木藤左工門が 15 代矢内稻太郎へ発注したものです。間口 5 尺 5 寸、踊場 3 尺 5 寸、楽屋 4 尺 5 寸、使用材料も指定箇所以外は檜材を用いることなど細かな指定がなされています。

矢内匠家が手がけた屋台、山車は、現在 11 件が確認されていますが、現存するものは多くはありません。厚木市域では下荻野子合で現在も使用されている義太夫屋台が半原矢内流と伝えられています。

大工の仕事と道具

大工とは、家屋などの建築に携わる職人のことです。江戸時代に専門の仕事に分化し、住居を作る家大工、社寺造営に従事する宮大工、水車などを作る水車大工、荷車などを作る車大工、船を作る船大工などに専門化していきました。ただし、宮大工の需要には限界があり、家大工との兼業者も多かったのです。

大工は出職の代表といわれるように、各地に出向いて仕事をする出稼ぎ大工も多くいました。大工のうち棟梁とよばれる親方が、一切の工事を請負い、家作りに関する職人を手配して完成するものだったのです。

大工の仕事には、キザミとよばれる手仕事、スミとよばれる墨掛けがあります。家大工は、弟子入りすると仕事場の雑用などをしながら、鉋の磨き方、鋸の使い方などを習っていきます。はじめは板削り、穴彫り、楔作りなどのあまり重要でない部分の材料を渡されますが、その後天井張り・鴨居入れ・敷居の仕上げ設計・製図の初歩などの手ほどきを受け、一人前に育っていくのです。

さまざまな大工道具

大工道具は日本の道具の中でも「王者」といわれるほどに、世界的にも独特に発達してきたものですが、いつから発達したかは明らかではありません。

日本建築といえば、まず軸組工法といわれる木造建築が代表です。現存する世界最古の木造建築「法隆寺」には、^{のこぎり} 鋸、^{おのきり} 斧、^{きり} 錐、^{ちょうな} 鉦、^{のみ} 鑿、^{やりがんな} 槍鉋による加工の痕跡が残っています。

そこには、現在の大工道具の基本となる代表的な工具がすでに用いられていました。職人は、道具を手の延長というより、自分の手そのものとして、多くの道具を駆使できたとき、卓越した技術者となれたわけです。

伝統的な大工道具は種類及び数が多いのが特徴です。鉋を例にとってみましょう。大きく分けると、平鉋・際鉋・面取り鉋・溝鉋・丸鉋などがあります。さらに平鉋には荒削り・中削り・仕上げ用などがあるのです。

現在では、大工道具の基本的な道具である
鋸、鉋、鑿などは電動化が進んでいます。

「衣食住之内家職幼絵解之図」にみる 大工の仕事

明治時代の教育用摺物シリーズの一つとして文部省から発行されたものです。一軒の家が建てられるのにどれだけ多くの職人が関わっているのか、その作業を解説した20枚一組の錦絵です。以下「衣食住之内家職幼絵解之図」（歌川国輝画）に描かれた建築工程を紹介します（青色文字の9枚を期間中に展示替）。

*

設計相談、 木材の伐採、 木材の運搬、
材木の購入、 鍛冶屋、 瓦・煉瓦づくり、
鳶職の地形、 石工基礎石据え、 大水盛り、
木挽の製材、 材木のきざみ、 上棟作業、
？ 葺き、 木舞づくり、 瓦葺き、 左官の
荒壁塗り、 大工の内法造作、 植木職と左
官の上塗り、 建具づくり、 経師の障子・
襖張り、 畳づくり、 外装仕上げ

*

現在の建築現場と比べ、多種多様な職人が関わっているのがよく理解できる錦絵です。